

# 竜楽のおじやまします！



**山田昌弘** 教授

やまだ・まさひろ 1957年東京都生まれ。86年東京大学大学院社会学研究科博士課程終了。東京学芸大学教育学部教授を経て2008年度から中央大学文学部社会学専攻教授。専門は家族社会学。パラサイトシングル、格差社会、婚活の名付け親でもある。



**三遊亭竜楽** 落語家

さんゆうてい・りゅうらく 1982年中央大学法学部卒。85年三遊亭円楽に入門、93年真打昇進。日本放送作家協会会員。中央大学では、学員講師として各地で講演を行う。朝日新聞夕刊で「らくごよみ」連載中。

## 格差社会の歩き方 ——得意分野を作ろう——

**竜楽** 本日のゲストは山田昌弘先生です。肩書きは家族社会学者ということでよろしいでしょうか。今、テレビでも大活躍ですし、「格差社会」という言葉で流行語大賞もお取りになられました。落語にも「家族」がテーマの噺が多いものですか、そんなことを結び付けて。

**山田** そうですね、私も好きな噺は多いです。

**竜楽** 初めに今の学問とのご縁のようなこと、大学に入られてから今に至るまでをお伺いしたいと思います。

**山田** いつの間にか社会学の中で、家族に関する「家族社会学」というものをやり始めました。私が大学に入った76年ぐらいは家族は安定して、あまり人気がなかったのですが、80年代、90年代と段々と。こんなことを言うのも何ですが、社会問題が起きると需要が増えて、安定しているとお呼びがかからないのです。

**竜楽** 今はあまりいい状況ではないということですか。

**山田** そうですね。つまり私が大に入った頃は、みんな25歳ぐらいまでに結婚していて、離婚も少なく

で、すごく安定していたのです。私が入り始めてから結婚したくてもできない人が増え、最近はまだ格差が広がっています。だから私が活躍しないほうが、私の出番がないほうが、社会は安定して平和なんです(笑)。社会学というのは、何か社会に出てきた新たな問題を見つけ出して研究するところがあって、たまたま家族を専攻していたら家族に関するいろいろな問題が起き始めたので、それを解釈する人が必要になってきた感じなんです。私は早く引退して、落語を聴いて暮らしたいです。

**竜楽** いや、いや。

**山田** いえ、本当に(笑)。

△落語家は昔から婚活!△

**竜楽** 婚活ということで、先生の本も拝読させていただきました。そういう点で言うと、落語家もずっと婚活なんですね。つまり安定した処遇ではなくて、先に何があるかわからない。ポツンと地方から出てきて、基盤もなく暮らしている人が多いのですからね。そのうえ男性社会ですから、先に行けば行くほど選択肢が狭まっていく状況があるのです。

先生の本にも、営業活動のしゃべりと恋愛のしゃべりとは違うというよりなものがありました。しゃべりが商売なのに意外にふだんは無口な人が多い。

**山田** 今の大学院の状況も、専門職であればあるほどそうなっています。大学の先生になれる人は博士を取った人の3分の1です。3分の2は定職に就けずに一生を終る状況になってきたので。落語家的な状況が、あらゆる若者に広がってきてしまったのが今の状況なんです。

**竜楽** 私が卒業した頃は、4人に1人は課長にはなれるという感じでした。

**山田** そうですね。大卒だったら、ほぼすべての人がなれたという時代ではないでしょうか。つまり、ここ15年ぐらいの間に、安定した社会から不安定な社会に変わってしまった。**竜楽** 婚活の話にかけて申し上げますと、落語の場合だと必ず大家さんが世話をしたり、間に入って口をきく人が登場します。

**山田** この前、聴いたのですが、借金を返すために妊娠した女性もらう嘸、何でしたっけ。

**竜楽** 『持参金』ですね。実際にあんなこともあったんでしようね(笑)。

**山田** あつさりど、借金を返せるなら誰でもいいやと。昭和30年ぐらゐまではそういう状況だったんですよ。とにかく生活できればいいやと結婚してたのが、状況が少し変わってきましたね。

**竜楽** それだけ選択肢が増える、自由ということの不自由さというやうなこともあるのでしょうか。

**山田** 昔は制約があつて不自由だったから、恋愛に燃えたという点はあつたでしょうね。今は逆に自由すぎてしまつて、どれが本当の恋愛かわからなくなつたり、こっちが好きだと、あっちが好きじゃなかつたりとか、いろいろ出てきましたので。**竜楽** 携帯電話が普及すると、今、別れた人とすぐ話ができてという状況ですよ。前は別れたら、いつ会えるかわからないとか、電話をかけて親が出たらどうしようということもありましたけど。

**山田** そうなんです。電話でコミュニケーションをする前に、相手の状況はどうだということを考えな

ければいけなかつたのですが、今は考える必要もない。少し前に学生に「携帯電話がなかつたとき、どうやって待ち合わせてたんですか」と聞かれたのです。今は待ち合わせで待つという体験自体がなくなつてしまつたのです。携帯電話で連絡し合えば、遅れるにしても「何分後に着くよ」と入るので。昔は本当に来るのか、来ないのかとか、ドキドキしながら待つていました。失われたものも多いですね。

**竜楽** 携帯でいちばん恩恵を被つているのは我々の業界なのです。つまり、寄席というのは、誰かが出ているときに次の演者が来ていないことがあるんです。その時は、座布団に座るとすぐ羽織を脱いでポーンと舞台そでの出入口に放ります。次の演者が楽屋入りすると、戸をそつと開けて羽織を持つて行く。それを見て、「あ、次が来たな」ということで安心してストーリーに入るのです。ところが今は「3分後に着くよ」というのがすぐ楽屋に入りますから、前座が非常に楽なのです。何分延ばせばいいとか。

**山田** なるほど、あらかじめわか

るわけですね。

**竜楽** 私も1回ありましたが、次がいなくて延々しゃべり続けなければならぬという辛さといつたら(笑)。

先生もご記憶だと思いますが「呼び出し電話」という落語がありました。うちに電話がなくて隣の家で借りるという。

**山田** それは昭和30年ぐらゐまでは十分ありましたね。

**竜楽** そういふふうにいるいろいろな文明の機器が進歩してくると、人々との触れ合いは弱くなつてきますね。

**山田** 形態は変わつていきますよ。私は弟子と一緒に単身赴任の研究をしているのですが、最近の単身赴任は全然、悲惨ではないんです。昔は電話するにも長距離でお金がかつたし、生活も不便だったからすごく悲惨な話とか、単身赴任は日本の企業の悪い風習だとか言われましたが、単身赴任を調査すると、「単身赴任をしたおかげで夫婦仲がよくなった」「単身赴任をしているほうが夫婦間のコミュニケーションが取れた」とか。単身赴任をしていな

いときは、夜帰ってもほとんどしゃべらずにいたけれども、単身赴任をしたら連絡を取ったついでに日常の細々としたことも話すようになって、むしろ仲よくなったとか。

### 〈本当の豊かさとは？〉

竜楽 そういふ状況になっているんですか。

家族というものが、戦後から今に至るまで、決定的に変わってきたのはいつぐらいですか。

山田 やはりここ15年ぐらいですか。結局、結婚できない人が増えたことが大きいわけです。とにかく昔は、生活が豊かになることが家族の喜びだったわけです。昭和30年代にはテレビが手に入り、みんなで出かけるファミリーカーが手に入る。そうやって家族の生活が豊かになることによって、家族がまとまっていた時代があったのです。

それが1980年ぐらいから崩れ始めるのです。豊かになり、家族で買うものももうなくなりました。人たちがいることが一つ。あとはコストが高くなり、経済的にやっていけない人が出てきて、結婚ができな

くなるというのが一つですよね。

竜楽 昔のほうが豊かなんですか。

山田 人間の豊かさ

というのは、正確に言えば昨日と今日、今日と明日の差で計るのです。昭和30年代、40年代というのは、昨日より今日が豊かで、今日より明日が豊かになることと決まっていたから、そういう意味で豊かでした。今は物質的には豊かですけれども、子どもに「昔はケーキなんて誕生日しか食べられなかったんだよ」と言っても「えっ?」という顔をしていますよね。あるのが当たり前になってしまおうと、プラス・アルファによって豊かさを感ずることが難しくなるわけです。

竜楽 落語の『ただく』という噺が面白いですね。何もなくなった男が、絵のうまい人を呼んで部屋の中に絵を描いてもらって、そのものがあるつもりで生活しようという。



山田 思い出しました。泥棒が入ってきてというやつですね(笑)。覚えてます、その噺。

竜楽 泥棒も見たら紙に描いてあって盗めない。「何だ、あつつもりで生きてるのか。じゃあ、おれもそのつもりでやってやろう」というのでこう盗んで。

山田 盗んだつもり(笑)。  
竜楽 槍があって、槍でプスッと

突いたつもり、こつちも突かれたつもり、えぐったつもり、だくだくと血が出たつもりというオチですよ。

山田 私、好きです、あれ。

竜楽 あれなんか本当に何もなくても、気持ち一つで豊かになれるという噺ですよ。

山田 最初はつもりであつても、いつかは手に入るといふことであれば希望ではないですか。逆に、今

あるものがなくなるかもしれないと思うと、いくら今あっても豊かな気持ちでなくなるということですね。今の状況がそうで、30、40年前には考えられなかったような豊かな生活をしているのですが、将来続かないかもしれないと思えば不安になります。

竜楽 日々実感できることが大事だということですか。ステップアップしているという。

山田 昔はそれがうまくいったということですね。今、新しい本(『幸せの方程式』)を書いているのですが、そのテーマもそれなんです。昔は家族の中で、ものが増えていくことに喜びを見いだしていたけれども、それが限界に来ているので、別の形の喜びを見つけないといけない。ものは普通であれば、落語にはまる人は毎日落語を聴けるのが幸せだとか、「そういう方向にだんだん変わっていかねばいけないよ」みたいな話もありますね。

### 〈家族関係にも格差〉

竜楽 家族間のコミュニケーションはどうですか。

山田 昔に比べて、家族間のコミュニケーションは思ったよりも増えているんです。庶民の落語ではけっこうコミュニケーションしてはいますけれども、例えば小津安二郎の映画などを見ると、黙つてみながら食べていて、家族間の会話なんてほとんどないんです。最近は格差が出てきましたね。すごく仲よくいっぱいしゃべっている家族もあれば、あまりそうではない家族もある。仲のいい家族はコミュニケーションが取れて、ますます仲がいいんですけども、逆に「嫌だ」というのも増えています。いろいろなどころで「新平等社会の二極化」と言っていますけれど、格差拡大が起きていますよね。

竜楽 親に依存しているわけでもないんですか。

山田 私は「パラサイト・シングル」という言葉をつくったので

すが、やはり依存はしていますよね。精神的依存というわけではないので、昔に比べて悪くなっているわけではないですね。むしろ私よりも上の全共闘世代のほうが、親子で価値観がすぐ対立していましたよ。

うというエネルギーになったんです。が、今は変に仲がいいので、まあ、自立しなくてもいいんじゃないかみたいな感じになっていますね。

竜楽 それは健全なところもあるんじゃないですか。

竜楽 私も親が望まない展開になった最たる者ですが(笑)、子どもが親の思うとおりになっているということは、あまりいい状況ではないですよ。極端な例はともかくとしまして。



山田 社会的にもそうだし、子どもの将来を考えると私もそうは思うのですが、反発して、対立すればいいというものではないですが、日本の社会はなかなか自立というものに価値を置かないので。

竜楽 昔からそうなんですか。

山田 昔は家の跡を継いで、お父さんの職業を継ぐという感じだったわけですけども。戦後から高度成長期にかけては一人暮らしが多かったのですが、今は未婚の8割は親と同居していますし、子どもの数も少なくなりましたから。昔は4人いたのが今は2人ですから、親と仲よくなる確率は増えますよね。

### 〈安定・安全志向の若者達〉

竜楽 今の学生さんを見て、先生もその中で教えてこられて、やはりここ10年くらいですか。

山田 20年前と比べれば、ここ10年くらいで相当変わってきました。

竜楽 親と仲がいいというのはちよつと意外でしたね。

山田 昔から日本は娘と母親は仲がよかったのですが、最近は息子と母親も仲がいいみたいで。

竜楽 すべてが「格差」となってしまうと今後どうしていくかというのは、国の力も必要になってきますね。

山田 アメリカでは、国は何もしていないのですけれども、20歳くらいになれば親も放り出すわけです。だからとにかく自分で何とかしなければいけないという意識がすごく強いわけで、若い人は必死になるのです。

日本社会だと、お金に余裕のある家の子どもは安心してしまい、お金に余裕がないところの子どもはあきらめてしまう傾向があります。日本のような状況だと国がいろいろな形で下支えをしたり、自立を促したりしなければ難しいと思います。アメリカのように厳しくて、一生懸命仕事をしなければ生き残れないのがいいかどうかはともかくとして、日本の若者はのんびりして安定・安全志向という感じですね。

竜楽 税の問題にしても累進課税みたいなものをもっと推し進めるとか、そういう手当が必要だと先生のご意

見の中にもありましたね。

山田 実を言うと、日本というのはあまり金持ちがない国なので。累進課税は必要だと思えますが、累進課税の分だとあまり影響しないのです。イチローを見ればわかりますが、アメリカだと年収10億円、100億円がいます。日本は宣伝されたほどには、それほどいいのです。

竜楽 アメリカは数パーセントが富の大半を握っているというのがありますね。

山田 ええ、すごい国ですから。

日本は格差拡大と言って、拡大しているのは下に落ちていつている人ばかりという悲しい状況があつて。だから、中ぐらいの人が貧しい人を支える。特にお年寄りがいっぱいお金を持っているのに、不安だから抱え込んでしまっている。だから「オレオレ詐欺」に引つかかってしまうわ



けです。

**竜楽** 10年たつとかなりの割合の人がお亡くなりになります、どうなりますか。

**山田** そこでパラサイトをしている独身の人たちが、ちよつと大変になつてくると思つています。35歳から44歳までで親と同居している独身の人が今、260万人以上います。

1割がニートで、1割がフリーターなんです。たぶん親の年金に依存して生活している中年の人が、50万人から60万人はいるのです。親が亡くなつたときは、その人たちは放り出されてしまふ。

### △女性の婚活は宝くじ??▽

**竜楽** そのぐらになつているとその人たちはほとんど結婚しないんですか。

**山田** しないですね。しないというか、相手がいないので。男性の場合は収入が低いから、結婚しないで親元にいるわけです。調査に行くとは40歳で結婚活動をしている人がいて、月収が8万円ぐらいたつたものが、この不況で週休4日になつて5万円ぐらいに減ると言うのです。「結婚

できると思いますか」と聞いて

しまった人がいて、「愛があれば、おれと一緒に

苦勞して親の面倒も全部見てくれるはずだ」と言つて、愛を夢見

ている人がいました。

調査をして、30歳、40歳の女性のフリーターの人に「将来どうですか」と聞くと、「収入

の高い人と結婚して専業主婦になりたい」と言うのです。待つてい

ば自分を好きになつてくれる、収入

が高くて、ハンサムで、優しくて、浮気しない人が現れると思つてい

るんですよ(笑)。だから『婚活時代』にも書いてあるのですが、待つ

ていけば自分に都合のいい人が自然と出てきて、うまくいくはずだと思

いながら年を取つていくのです。**竜楽** 全然、現実離れしているんですね。

**山田** 専業主夫の調査もやつていて、女性が働いて、男性が家事をするというものですが、落語家さんにも

いませつか。**竜楽** 現実的にそういう状況になつて

いる人はおられますね。



**山田**

研究者もけっこういますけど。そういう男性はけっこう格好いいですよ。

**竜楽** どうですかね。我々のほうは、そういう点でいうと、ものすごい格差ですから。

**山田** その格差が今の若い人にも、同じような状況になつてい

るんですね。正社員になれた人と、派遣切りに遭つてい

る人と、男性の格差がありますから。

**竜楽** でも夢を見られるというのが我々の救いかもしれませ

ぬ。一発当てるといふわけのわからない夢を見られますから。

**山田** 落語家さんは、上がつていくので、わりと見えやすいではないですか。

**竜楽** 段階もありますけどね。

**山田** 30歳ぐらゐのロックスター志望のフリーターの男性に、40歳になつたらどうしているかと聞いたら、



くわけです。

**山田** なるほど。ランクがあがっても、お呼びがかからなくなる。

**竜楽** 逆にランクが邪魔になる場合だってあり得るわけです。昔は生涯前座という人がいたみたいですね。そうすると寄席から最低限の給金が出ますので。

**前座**、二つ目、真打ちという階級がありますが、ご存じのように真打ちはトリを取るから真打ちです。その日の収入を寄席と四分六とか折半とかで分けて、トリの人がまず全部取る。そこから他の演者にその日の出演料を払います。たくさん呼べる人は、残りを全部もらえますが、呼べない人は持ち出しになってしまうので、真打ちになるとますます貧乏になる場合もあるんです。

**山田** なるほど、もうけが少なくなるわけですね。

**竜楽** ですから、私はずっと前座でいますというような60歳過ぎの前座とか。師匠の円楽が入った頃は、そういう人ががけっこういたらしいですね。

**山田** 逆に安定収入が常に見込める感じですね。

**竜楽** そうです。増えてはいかないですけども、副業みたいなことをやったりすればというようなことはあったみたいです。

**山田** ただ、実力と市場価値で計られるではないですか。でもフリーターとか、そういう人が狙う一発逆転というのは、訓練の結果として成功があるのではなく、宝くじに似ているのです。特に女性の婚活は宝くじに似ていますね。どこかに行けば、キャリアウーマンを逆転できるに違いないという感じですよ。

**竜楽** それはフリーターの人が多いです。

**山田** フリーターの女性はそうですね。フリーターの女性は高収入の人と出会って結婚すること以外に、自分の人生の逆転はないと思ってしまうので。

**竜楽** フリーターであり続ける限りは。

**山田** 逆転はないですね。

**竜楽** そういう点で言えば、どんな仕事でも熟練していけば上がっていくというか、何か大きなものがつかめるということではない社会に。

**山田** そうなりつつありますね。

正社員であれば会社も責任をもって、とりあえずステップは上がらせてくれますが、そうではない人が増えてしまいました。

**竜楽** そんなことを言っただけではありません、そういう人ばかりをインタビュウをしていると大変ではないですか。まず聞くこと自体が困難だし、かなりストレスがたまるのは……。

**山田** それは社会学の基本というか、逆に言えばインタビュウしやしない人にインタビュウするのだったら、学問的価値はあまりないんです。だから、私は離婚経験者へのインタビュウ調査をしたのですが、離婚されたほうは応じてくれなくて、もう二度とつらい経験を話したくないという感じで。自分から離婚したほうは、べらべらよくしゃべってくれるのですが。離婚したほうの話でもつらい話がけっこう多いですが、なかなか離婚されたほうは……。

**竜楽** 人に話してもらうのは相当難しいと思いますね。

**山田** 十数年前に高齢者の夫婦関係の調査をやったのですが、結婚して40年、50年の70歳、80歳の人に聞

売れているか、死んでいるかと言われてしまいました。

**竜楽** でも、落語家もステップアップで階級は上がっていきますけれども、収入は上がっていきませんから。

**山田** でも、出るとランクによって出演料が。

**竜楽** そうなのですが、そのランクになって、それだけの仕事ができなければ出演箇所が極端に減って

くのです。高齢者はとにかく話した  
がって、私は夫婦関係のことを聞き  
たいのに関係ない自分のこととか  
(笑)。

竜楽 過去の歴史みたいなので  
すか。

山田 過去の歴史ならいいですが、  
今、私はどんなに病気で苦しんでい  
るのかみたいな話を延々と。聞きた  
いのはそんなことではないのに、で  
も話を折ってしまったら聞かせてく

れないので何時間も付き合ったこと  
がありました。この仕事をしている  
というるあります。

### △得意分野を作ろう!!▽

竜楽 今の学生さんのこと、も  
う一つは中央大学でやるべきことの  
お話を伺いたいと思います。中央大  
学に限らずに学生さんについて。

山田 安全・安定志向が本場に強  
まってきた感じがするので、何とか  
打破できないかと思うんですけどね。  
『南甲』という雑誌でもインタビュ  
を受けてしゃべったのですが、新卒  
一括採用システムがある限り、安定  
志向は止まらないと思いますね。

竜楽 私たちのときでも、とにか  
く生保だとか何か言っていましたね。  
30年ぐらい前からそうですから、そ  
の状況は基本的には変わってない  
ということですかね。

山田 変わっていないのですが、20  
年前ぐらいのほうが、例えば、1年  
ぶらついていてもいいやとか、リス  
クを取ってベンチャーに行くとかと  
いう意識がまだあったと思います。  
最近は何も見えませんか。とにかく  
安定・安全が第一ですね。将来出世

してやろうというのではなくて、と  
にかく生活費が一生稼ぎ出せるよう  
なところにまず行く。あと、貯金が  
趣味という学生が現れましたよ。と  
にかくお金を使わないんです。師匠  
はだいたいバブルの頃ですよ。

竜楽 私は先生と同じぐらいです  
から、就職はわりとよかった頃です。

山田 私も大学に就職したぐら  
いときは、一流ホテルで卒業パー  
ティをやっていましたね。今から考  
えると、それは将来の心配がないか  
ら安心して、いろいろなことや消費  
に手を出せたと思うのです。

今は将来が不安なので、とにかく  
お金を貯めておこう、そして安定し  
たところに就職する。堅実ですけれ  
ども、面白みがないのです。ベン  
チャーに行つて一旗揚げようとい  
う人がいれば、頑張れよと言っ  
たところなんですよ。

竜楽 嘶の世界でもそうで、入  
ることが目的、なることが目的で、あ  
とはふわふわ生きていければいい  
みたいな。

山田 こんなことを言うのもあれ  
ですが、大学の研究者の世界もそ  
うなっています。私の頃は、どん

なことを研究したいかということが  
まず問われた。就職はいずれできる  
ものだと思っていたから、好き勝手  
なことを言つて、偉い先生にも反発  
して。

今の大学院生はおとなしくて、先  
生に言われたことしかやらないし、  
先生に逆らうと就職できないと思っ  
ていますから。就職するためには、  
どういう研究をしたらいいかという  
ことを聞いてくるわけです。それは  
本末転倒だろうと思うんですが、で  
も現実を考えると就職できない人が  
大半なので、好きなことをやってい  
たら就職できない。就職できそうな  
研究をするというふうに変わってき  
ていますね。

竜楽 逆転ですね。学問が好きと  
いうことは全然、別のところにな  
っていますね。

山田 そうなんですよ。こんなこ  
とを言うのも何ですが、私、安泰な  
んですよ。私に反する学説とか、新  
しい説を提起する若手が減つてき  
ているのですから、私が10年、20年、  
第一線でやっていられるのです。  
竜楽 例えば答案などを見てもそ  
うですか。







山田 まあ、無難ですね。

竜楽 今ほどこの大学の個性というでもないと思いますけれども、中央大学はちよつと違うというところはありますか。

山田 こんなことを言うのも何ですが、普通ですね(笑)。バンカラでもなく、何か危ないことに手を出すわけでもなく、羽目を外すこともなく。といって、すぐフアッシュヨナブルでおしゃれというわけでもなく、地味でもなく。カラーがないのがカラーなのかよくわからないのですが、普通でまじめで先生としてはすごくいいですね。

竜楽 やりやすいですか。

山田 教えやすいし、言われたことはちゃんとやってくるし。

竜楽 もともとまじめで、どちらかというと堅くて、どちらかというと実学派の人たちが多い。

山田 そうでしょうね、資格に興味があつて。

竜楽 中央大学は非常に芸人が少なくて、中央大学を出た落語家は、私が入るまで1人しかいませんでした。私のあとも15年ぐらいいなかつたのです。6、7年前に中央大学の落研出身の人が初めて入つて、もう1人入つたぐらいいです。あと三平君がいますが、ちよつと別枠ですから。

山田 新三平。

竜楽 中央大学なんです。皆さん堅実で、まじめな人が多いですね。

山田 平均的に見れば、そんな感じがありましたね。

竜楽 先生のご本でも、ただワードとかツールを知っているだけでは、本当に自分を發揮できる仕事に就けないという話がありました。そうでない人を養成するためには。

山田 プラス・アルファの能力が必要になつてきたのですが、それをどうやって身に付けさせるかというノウハウはあまりないので。とにかく得意分野とか、誇れるものをつく

れとは言っています。はまるものというのですか、落語にはまつても構わないわけですし。

竜楽 はまること自体が少ないということですかね。

山田 今の学生を見てみるとそんな感じですね。

竜楽 ある時期、何かに夢中になつて全然、勉強しなかつたりということは少ないんですかね。もともとそういうエネルギーがないはずはないと思うんです。何となく押さえつけられて、出さないようにしているのでしょうか。

山田 それは中央大学だけの問題ではなくて、日本社会全体が将来に對する不安というものに覆われてしまつています。特にここ1、2年はそうです。不安を解消するためにこつこつまじめにやつて、安定した道を探し求めるしかないということになつているのが、日本社会の不幸ではないかと思ひます。

この前、テレビの取材に同行してオランダに行つたのですが、失業者もあつたらんとしているのです。オランダは新卒一括採用ではないので、ある失業した人にインタビュー

したら、大学を出て1年間は世界を放浪してきたと言ふのです。オランダでは、それは異様なことではなくて、帰つてきて5年間働いて、クビにされたけれども、また見つかるだろうという感じでした。前向きというか、いろいろなことにチャレンジしながら、30歳ぐらいいまでに将来の職を決めればいいというような話をするわけです。今、そういう社会のほうが強みを發揮している気がしますね。

昔、企業社会の時代は新卒一括採用で会社に入つてしまえば、こつこつ順番に上がっていくことでよかつたと思うのですが、これからは新しいアイデアやコミュニケーション能力や、まさに美的センスみたいなものが必要になつてきているのに、なかなかそれにチャレンジしようとする人がいないのは、若いうちにそれを評価する大人社会がないということだと思ひます。

落語が好きでこの世界に入つて、数年してまた会社に戻っていくということがあるのもいいと思うのです。私ももつと若ければ師匠に入門して(笑)。

竜楽 いえいえ、そんな。

山田 若くなくてもいいんですけれども。私も落語を見ながら、講演でこういうふうに笑わせればいいなとか、多少は考えながら楽しんで見えています。

竜楽 ありがとうございます。

山田 竜楽さんの事も参考にさせていただきます。

竜楽 家族が崩壊している、例えばイタリヤは家族や地縁で結ばれていて、そこがかなり守ってくれるから格差が気にならないということがあったように思ったのですが。

山田 日本も近いところがありますが、あまり活性化した社会ではないですね。安心はできるのだけれども、活性化はしないという感じがし



ますね。アメリカや北歐、イギリスでは、とにかく新しいことをやっていかないと生き残れないという圧力がかかる。かかりすぎてしまっている社会ということですね。

竜楽 それは、多少は必要でもあるということですか。

山田 そうですね、日本は今、安心が失われかけているので。安心もなければ活性化する気配もなく、活性化した人に対する評価システムもあまりできていない。となると学生たちは残り少ない安心に殺到している感じなので、今の若い人を見てみると、こういう社会状況ではかわいそうだと思います。

竜楽 最後に大学ができることというところでまとめたいと思います。

山田 個々の先生方がいろいろな意味で自覚して、学生の新しい能力を引き出してあげることが必要だと思います。これも婚活と一緒にですが、今までは放っておいても就職できたから、放っておいても自分でリスクを取って、いろいろはまるものを見つけて出してくれていたのですが、今度は大なり先生がもう少し個人々人を丁寧に見ながら、眠っている能力

を引き出す努力をしていかなければいけないと思いますね。とにかく私は一人ひとりの先生が、ただ単に授業をするというのではなく、個々の学生を見ながら能力を引き出すということをしなければいけないと思っています。

竜楽 これは大学のPR誌でもあるので、大学のいいところをもしごさいましたら。

山田 なぜ中央大学を選んだかと聞かれたら、半分冗談ですが、トイレがきれいだった(笑)。国立大学は予算がないので、トイレにまで回せなくてあまりきれいではないのです。快適な環境が整っているという意味では、私はいいと思います。

あと私は、眺めのいいところが好きなんです。外を見ると緑が多くて、ごちゃごちゃしていません。勉強し、研究する環境としては、すごくいいところだと思いますね。

竜楽 ありがとうございます。トイレの話できれいにまとめたいです(笑)。

## △対談を終えて▽

時代の最先端に行く山田先生との対談。内容の素晴らしさはもちろん、語り口の上手さに感服いたしました。昨今の結婚事情は修行中の落語家にとって別の意味で深刻です。披露宴の司会という大事な収入源が断たれてしまいますから……。

久しぶりに仕事が入った若手作家。とどおりなく進行役を務め、無事ウェディングケーキ入刀を迎えます。最大の山場に一段と声を張りー。「緊張するのも無理はごまかせん。お二人とも初めの！」

と盛り上げたところで、ご両人もパツイチという周知の事実がつかまりました。

「初めの……再婚でございませう」

再チャレンジは若々の特権。婚活も就活も失敗を恐れず大胆に挑戦しましょう。

